

― まず初めに、小林先生は「環状列石は劇場だ」とおっしゃっています。そのあたりからお話をしてください。

小林 環状列石は目立つのが特徴です。私はそういうものを記念物、モニュメントと呼んでいます。縄文人が何のために記念物を造ったのか、私はとても疑問に思いました。大湯にはかろうじて持ち運びできる大きな石ばかりでなく、二・三人がかりでも動かすことが容易でない石もあります。こうした石を7千2百個も運んできています。縄文人が役に立たないものを造るはずはないのだから、腹の足しにはならないけれど、頭の足し、心の足しになったのではないかと思っています。

この遺跡からは、土偶、石棒などが、他の遺跡とは比べものにならないほどたくさん見つかっています。いずれも矢じりや斧などのような日常生活に必要な道具でもないし、私はそれらを第二の道具と呼びました。石剣のように岩を削り出して研磨成形し、文様を彫刻するという手間暇をかけてつく

国民文化祭あきた2014

JOMON ART フェスタ

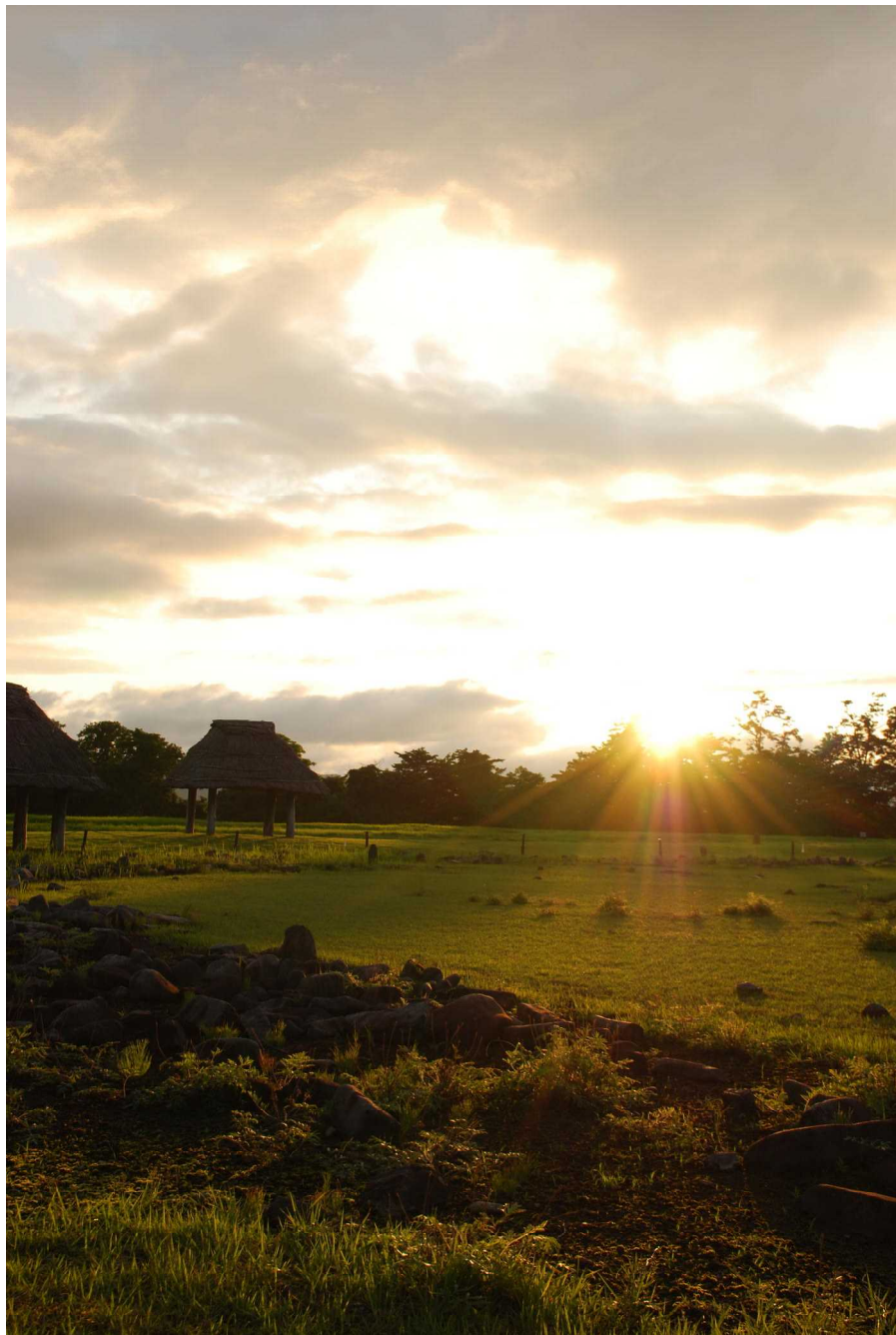
特別鼎談

縄文の ココロと カタチ

不思議な形をした土偶、
大きな石を円形に並べた
ストーンサークル。
縄文の人々が残した
様々なカタチは、
現代の私たちに
何を語りかけてくれる
のでしょうか。

コーディネーター

元秋田県立博物館長 富樫泰時



【夏至の日没】縄文人は日ごとに位置を変える日の出、日の入りによってカレンダーを作っていたと考えられています。



神谷美保子

京都府生まれ。歌舞に剣の技を融合させた桜月流美剣道を創流。



小林達雄

新潟県生まれ。國學院大學名誉教授。考古学に新たな地平を切り開いた縄文研究者。



猪風来

広島県生まれ。縄文造形家。生命と魂をデザインした作品を多数制作。



【マツリの道具】大湯環状列石出土／約4千年前／大湯ストーンサークル館蔵

られたモノもあります。縄文人は役に立たないモノに時間と労力をつぎ込むはずがなく、役に立つから手間暇を惜しまなかったのです。つまり、第二の道具はマツリ、お祈り、まじないなどに関係するモノだと思ふようになりました。つまり、祈りに応じた第二の道具を用意し、願いをかなえようとしたのではないだろうか。第二の道具は縄文人だけに理解できる意味をもつモノであり、現代人がどう考えても、その目的や意味がわからないでしょう。大湯環状列石は縄文人が心を込めて祈りを捧げる様々なイベントを行った神聖な場所、劇場空間であつたのかもしれない。縄文人がこの劇場空間を数百年もつくり続けていたのだとしたら、記念物の造営は縄文人にとって、とても大きな意味をもつものだと思うのです。

— その劇場で、舞を舞った神谷さんと呼ぶ石があると聞きました、そのあたりのことも含めてお話をしてください。

神谷 私は三年前の夏至の日に、初めて大湯を訪れました。夜中に遺跡内を歩いていると、私を呼ぶ石があつたんです。その石に座ると、お尻がすっぽりとはまる石でした。私はそのカタチを覚えていたような、かつてここにいたことがあつたのではないかと思う体験をして、ずっと作品づくりを考え

ていました。これだけのものが残っていて、縄文人はきっとマツリをやっていたと感じたので、昨日の作品につながったのです。

ストーンサークルのカタチは、円の中心に向かったり、中心から何かを発したりしたいと思わせるカタチですね。実際に舞ってみると、どこに行ってもエネルギーが戻ってくるような感じがしました。



— ここを初めて訪れた印象はどんなものですか。

猪風来 ここは生死再生をめぐる劇場で、縄文人が宇宙と交信する場ですね。全体の大きな円は宇宙に対応する空間で、その中に男性原理の空間と女性原理の空間があります。石を使つた造形は、男性のつくつたものと思つていましたが、女性原理が大きなパワーを発信しているの、女性が主導してつくつたのだと思います。考古学的には根拠がありませんが、石は男性が運んだのです。

南米エクアドルのムラでも、女性が野焼きをします。土を掘り出し、煉つて、寝かせ、造形して野焼きをする工程を、全部女性がやります。各戸に一つずつ野焼きの場があり、そこは男子禁制です。大湯ストーンサークルも精神世界を司る中心は、やはり女性だと思ひました。男女が役割を分担しながら、この大きな空間をつくり出

し、生死するものをなぐさめ、更に新しい命を生み出していくマツリをやつたのだと思います。

— 縄文人が長年かけて、ほぼ完成に近いカタチのストーンサークルを造つたと見えているんですが。小林先生はどう思いますか。

小林 記念物は目立つものでなければならぬ。一定規模のカタチをデザインするため、円く造られた記念物が各地で見られます。石だけでなく、土を盛り上げて土手を造成するもの、巨木を並べて立てるものなどが見られます。縄文人はこうした記念物の造営を数百年も続けてきたのです。円くするだけなら、縄文人は簡単にできたはず。ところが、石の配置に部分ごとにはばらつきがあつても、それを問題視している様子はありません。実はムラごとにつくる場所が決まっているから、働き手の多少によつてばらつきがあります。記念物の造営に関わる人々が寄り集まつて力を合わせ、長く造り続けることこそが目的であつたと思うのです。だから、いつも完成しているが、未完のままなのです。終わるときは簡単です。新しい時代の風が吹くとピタッと止めます。縄文人が、造営をなぜ止めたのかわからないのは仕方ないことです。縄文人の心をつかむのは難しいという事です。



― 劇場の舞台で踊ると、ここで踊ると気持ちの上でどう違うのですか。

神谷 私は屋外で風を感じながら舞うのが本義とっています。舞は回転が軸になるので、舞うときに渦を作ったり、軸をとって円く回るんです。猪風来先生がおっしゃるように、舞も宇宙と交信する手段なのかなと思っています。天とつながるときに自分の中に力をもらえるものだと。

以前、私は小林先生に、大英博物館で開催された土偶展に連れて行っていただきました。土偶の中に、何かに耳を傾けるポーズをしたような土偶がありました。私が石に呼ばれるようにして座ったとき、何となくそのポーズをとったんです。そのとき、これは夢をもらうポーズなのだと思います。夢はすごい力があり、必要だから人は夢を見るのです。そう祖母に教わりました。縄文人も自分もらう夢をすごく大事に思っていたと思います。縄文人もこのポーズをとって夢を呼び、その夢を思い起こしてたのではないかと思いました。



― 猪風来さんは縄文人の作った土器を色々見て、それを担って土器づくりをやっています。土器を作るときは信条とかそういうことを含めてお話しください。

猪風来 私は千葉県で畑で土器片

を拾ったとき、心の奥底からふつふつと沸いてくる感動を覚えしました。自分がやっていた油絵の世界は「外」から響いてくる感動だったのに、土器のかけらに接したときの感動は「内」から沸いてくる感動だったんです。その感動が何なのかを知りたいと思います。土器を作り始めました。千葉県の加曽利貝塚博物館の土器作り同好会に合流し、技法上は二千年ぶりに縄文土器を復活させました。

ところが、やっぱりわからない。色々な人が縄文を語っていますが、全く響いてこない。もう体験するしかない、縄文暮らしをやるうというところで北海道に堅穴住居をつくり、二十年間自給自足の生活をしました。感動の所在が最初に分かったのは、四男を授かった時です。私が産婆をしてとりあげたわけですが、女房が堂々たるものです。女性はある世からいただいた精霊のエネルギーを胎内で命に変え、この世に産み出します。はかない命を授かった時に、縄文人は子どもを産み出す時のリズム、カタチを土器に表したのだと合点しました。それでもまた分からなくなつて、今度は断食をやるうと、命がけでした。堅穴住居の中は零下二十度にもなるので、朝起きると髪に氷柱が下がります。湿気がすごく、冷気と湿気を飛ばすために炉で火を焚きます。炉は家の心臓という役割をもっていて、その暖気から命が生まれ出てくるのです。命は地球に抱かれ、太陽に響いて生きています。そういう縄文の精神世界の論理が生きてきたと分かるようになってきました。

― もうすっかり縄文の心がわかつてしまったと。

猪風来 私もうわからないところがあります。心はわからないと創作できません。いくら技がわかっても、似て非なるものになってしまいます。心をつかむために命がけ、よくも北海道で生き延びて、ここに命があると思っています。

縄文造形は縄文人から授かった新しい世界です。それを復活させ、現代に生かし、かつ未来への美を生み出していくためには、自分の命を捨てるほどの覚悟がなければダメなんです。二十一世紀の新しい美を生み出せるものと信じて、若い世代にも取り組んでほしいと思っています。

― 小林先生、ここは日本を代表する環状列石ですよね。



【大湯環状列石全景】万座環状列石（左）と野中堂環状列石（右）

小林 縄文人の残したストーンサークルが、目の前にあります。僕は先ほどの神谷さんの話の全てを理解できません。ところが、僕は理解できないけれど、いわゆる靈感の強いそういう人がいることは知っています。神谷さんはその一人です。その他、縄文太鼓の土取利行さんや、パートナーの桃山晴衣さんも、そういうものを感じるんです。それから、私の娘が多少の靈感をもっているようです。そういう娘です。子どもにも遺伝しています。孫はヨーロッパ各地



の教会を訪ねて、教会の絵を見るのが好きですが、泣き出して入れない教会があるんです。

神谷さんがひかれたのもそのようなもので、ここにはこの霊があつて、それがわかる人、交信できる人がいる。縄文人にはもつとたくさんそういう人がいたのかもかもしれません。だから、縄文人がこの場所を選ぶとき、一人、二人がトランス状態になつて、「この場所だ」とわめきちらしたのではなく、我も我もと何人かが「この場所だ」と言つて決めたのではないでしようか。私の周りには何人もそのような人がいます。私が知らない世界がいつばいあるということを思い知らされます。

― 神谷さん、何かこの遺跡との関係があるかもしれませんね。

神谷 私は祈る女、舞う女というテーマを持つていて、大学では古代女性祭祀を卒論のテーマに考えています。私は昔から神的なものや精霊など、自分たちには及ばない力に対して人々が歌ったり舞ったりすることにすごくひかれるんです。この遺跡は最たる所で、本当に聖なるものやスピリットに対して、捧げ尽くすようなことにひかれるんです。

ポスターで見かけた小林先生のお姿に後光が差して見えたので、会いに行かなければと思いました。私は桜月流という剣の舞をやっているので、剣について教えていただきたいと思い、講演を聴きに行きました。先生の研究室には、色々な方々がお集まりになります。先生を慕う方々から剣について教えていただいたり、ユネスコに招かれて公演をしたときには石剣を作っていたりしました。縄文に向き合う時間を先生が作ってくださり、大湯まで連れてきてくださつたのです。

― 猪風来さん、ここにある2つの作品は、何かあるのですか。



猪風来 これは縄文の鈴と、土偶型の鈴です。土偶型の鈴は女性に子どもが入つていて、音を出しているということがわかりますね。これを単純化、抽象化すると丸い

鈴になります。鈴の音は、母体に宿した子どもが躍動する命の音です。鈴の音は魔を祓うソフトパワーで、その力で縄文人は人を幸せに導いたのです。大湯環状列石は、そういう力を沸き立たせる場所だと思っています。

縄文土器を模写すれば、縄文人と交信できます。あたかも向こうに作者がいて、その人と対話しながら同じように形を作り、線を引き、ひねつて作つていくと、四千年二百年前の人と話ができます。過去の人と対話できる能力が人間にはあります。四千二百年前の人とここでは対話が可能だと思っています。



およそ2千個のキャンドルによってライトアップされた幻想的な光景は、遺跡を訪れた多くの人々を魅了しました。